




## 「雑」を見直す

浜口 順子

大学という職場で、同僚と「雑談」することの大切さを痛感する。あるテーマをもって話し合おうと集まるうちに、「そういえば……」と関連した事柄へ話題が転じ、そうして話のそれた先でまた花が咲くという展開。それが、ただ会議を冗長なものにし、当初のテーマに関する必要な対処をいたずらに先送りしてしまう場合はたしかに問題であろう。しかし、テーマしたいが現実には即していなかったり、テーマにまつわる事柄でメンバー間に十分なコンセンサスができていなかったりする場合などに、「そういえば……」による話題の多元化が、当初想定されていなかった展開を生む可能性がある。たとえば、メン



バーそれぞれにいろいろな周辺的問題を意識させ、日ごろから感じている不安や疑問を共有したり、同僚間の求心性を呼んだりする場合が多いのである。

道ではったり出会った知り合いなどと交わす、時節・天候の話、知己の近況、世間を賑わす事柄に関する感想……などの他愛のない会話も雑談といわれるものであるが、このような雑談を交わす関係には、心性の共有が伴う。また病院の待合室や乗り物に居合わせ、まったく初対面の人同士が雑談を交わしていることがあるが、そこにも、退屈や不安を紛らせようとする「場」から生ずる心性の共有がある。このような雑談をしている人を見ると、一般に高齢の方が多い。高齢者に話しかけられて、あからさまにいやな顔をした、イヤホーンに集中したりしている若者とのコントラストも珍しくない。そんな光景を見ると、(生涯) 発達段階的な差もあろうが、雑談を交わすような人間関係——いろいろな人と他愛ない話をするというような関係、もしくは「地域」的な関係——をより多く経験してきたいる世代と、そうでない世代との落差をつよく感ずる。話の内容はともかく、人と言葉を交わすという行為じたいによって自己存在を調整するという智慧を、会得する機会を逸して生きている人が増えているのかもしれない。

「雑談」というと、高尚な談話(というようなものがあるかわからないが)よりも低い価値しかないもので、高次の話題の間をつなぐものでしかないような印象がある。しかし、その「つなぐ」機能についてもっと評価されていいのではないか。従来中心のだと考えら



れている話題の隙間に浸透して、「中心性」じたいの如何を問う相対的な視点を用意するという意味でも、また話に参加する人同士の関係性をつなぐという意味においてもである。

雑学、雑多、雑役、雑感、雑念、雑踏、雑草、雑駁、雑菌、雑居、雑音……「雑（ザツ）」というはき捨てるような音や文字には、投げ遣りな注意、十把一絡げという扱いを受けた痕跡がある。「雑」という漢字の成り立ちからいうと、「いろいろな布を集めて作った衣服」の意があり、いろいろなものが混じる様子を表すようだ（雑木林、雑炊、雑巾などゾウと読む熟語もあるが、ザツに比べて蔑視的な印象は薄いのではないか）。種々さまざまなものが交じり合うことは、「不純」という軽蔑の意味づけに直結しがちであることを思い起こし、「雑」の意義を問い直したい。

日本における「雑誌」の嚆矢は一八六七年柳川春三による『西洋雑誌』であった（本田和子「雑誌の運命―『幼児の教育』創刊一〇〇年記念に寄せて―」二〇〇一年）。この『幼児の教育』という雑誌が、保育をめぐる中心的な問題が何処にあるのかを読む人それぞれの中に浮上させるきっかけとなり、またそれによって読者間のゆるやかなつながりを育むような、そんな「雑談」の場になればいいと思う。今号から本誌の編集に微力ながら携わらせていただく者として、そのような夢を持ち続けていきたい。

（十文字学園女子大学・お茶の水女子大学）